

「琉球文学大系」編集・刊行事業について

山 里 勝 己

(名桜大学学長兼大系名誉委員長)

2019年4月1日、名桜大学に「国際文化研究科 博士後期課程国際地域文化専攻」が設置された。開学25周年、公立大学移行10周年という節目の年は、本学にとって博士後期課程開設でさらなる飛躍の年になった。

博士後期課程の開設にあたっては、(1)琉球文学、(2)琉球民俗学、(3)中琉交流史、(4)中南米地域文化研究、(5)アメリカ環境文学研究を担当する5名の演習担当者と6人の特論科目担当者を文科省に申請した。幸い、全員がスムーズに大学設置審議会の審査をパスし、博士後期課程の開設となったのである。

教員の陣容を見てもわかるように、本学の博士後期課程は、環太平洋地域に軸足を置いて普遍的な研究を推進することを考えている。特に、琉球・沖縄研究、アジア研究、中南米研究は本学博士後期課程の大きな特色であろう。

正式な設置認可の後、9月9日に博士後期課程の教育研究と教員の紹介を目的として、キックオフ・シンポジウムを開催した。その時に、琉球文学担当の波照間永吉教授から、「夢かもしれないが」、この博士後期課程で「琉球文学大系」を編集・刊行したいという発言があった。

琉球文学や琉球・沖縄文化研究者の年齢、そして2009年に発表されたユネスコの「消滅危機言語」に琉球諸語が含まれていることを考えると、「琉球文学大系」の編集刊行事業は、いまの時期になんとかしないといけない、このタイミングで始めないと永遠に「夢」は実現しないと私はそのときに感じたのである。じつは、私は沖縄県振興審議会の「学術・人づくり部会」の部会長をつとめたことがあり、その時の答申の柱の一つは琉球語の保存、学校教育への導入、それによる琉球諸語

と文化の活性化であった。また、アメリカの大学院で英米文学のテキスト編集史について学んだことがあった。その時に、イギリス・ルネサンス時代から何世紀にもわたってテキストの研究、編集、刊行を続けているシェイクスピア研究の重厚さに圧倒されたことを、いまでも鮮明に記憶している。

このような背景もあり、私は学長として、また博士後期課程指導教員の一人として、波照間提言を夢に終わらせないために、すぐに波照間先生に企画書を準備することをお願いした。波照間先生から企画書をいただくと、当時の比嘉良雄理事長にそれをお見せし、編集刊行事業についての提案をした。比嘉理事長は、琉球の伝統や現代沖縄の文化状況について深い理解をお持ちの方で、企画書を見るとすぐに「やりましょう！」とおっしゃったのである。

それから、名桜大学の教育研究審議会、経営審議会、理事会で審議をし、全員一致でこのプロジェクトについて承認を得た。また、教育研究審議会と経営審議会の間、学長が諮問する学外評価委員会が開催されたので、この委員会の先生方にも企画書をお見せしてご意見をお願いしたところ、ぜひ進めて欲しいとの力強い後押しをいただいた。

2019年4月2日の『琉球新報』朝刊の一面は、新しい元号に関する記事と、「琉球文学大系」に関する記事の二つだけであった。この後、学外の多くの方々から書簡、電話、メールなどで激励の言葉をいただいた。

大きな事業である。大学と編集委員会が力を合わせてこのプロジェクトを推進し、事業が完結した暁には全35巻の圧倒的な存在感を全身で感じたいと願っている。

「琉球文学大系」への道

波照間 永吉

(編集刊行委員会委員長)

琉球文学研究が未だ持ち得なかった琉球文学の全ジャンルを網羅した「琉球文学大系」の構想がいよいよ実現する。名桜大学の取り組む事業として、大学の枢要な会議で認められ、その公表をうけ、県内二紙がこれを大きく取り上げた。これで「琉球文学大系」の構想は、琉球文学研究者はじめ沖縄県民、そして、琉球文学と琉球・沖縄の文化に興味と関心を抱く多くの人達の知るところとなり、期待を集めることとなった。

私は、一人の琉球文学研究者として、琉球文学の諸作品を網羅しこれを体系的に整理・配列したテキストのないことの不便さを、常々思っていた。開学以来勤めた沖縄県立芸術大学附属研究所を定年退職するに際しての最終講義で、これからの琉球文学研究の課題として、「琉球文学全集」の編集・刊行がなされなければならないことを語った。そのことが容易ではないことは承知の上で、若い世代への期待をこめてのことであった。その後、幸いなことに名桜大学大学院博士後期課程教員としてお声を掛けていただいて、再び大学院での教育と研究に携わることになったとき、あらためて、「琉球文学全集」のことが頭に浮かんできた。そして、博士後期課程開設のキックオフシンポジウムで、名桜大学でやりたいこととして、「私自身の研究としては、琉球文学研究の深化と研究環境の整備をめざしたい」と思っている。琉球文学全体のテキスト、たとえば『日本古典文学大系』や『漢文大系』などに類する『琉球文学大系』のようなテキストの集成は、早急に手がけなければならない大きな課題である。そして、これらのテキストに基づく精密な作品研究——注釈研究などが今後目指されなければならない。琉球文学研究は広大な沃野である。本研究科がこの沃野を耕す同士の集う、琉球文学研究の新しい拠点となれるよう、取り組んでいきたい。」と述べた。

シンポジウムでは瀬名波榮喜前学長からテキストや注釈研究などについてのご意見があった。その後、学長室で瀬名波先生、山里学長、山里純一教授、金城正英学長補佐、渡具知伸事務局長が出席して懇談会がもたれたが、「琉球文学大系」のことが話題に上がり、学長は、山里純一・赤嶺守博士後期課程の両教授はじめ、名桜大学の若い研究者の名前を挙げ、今や沖縄でこの事業が実現できるのは名桜大学において他にはないことを力説された。瀬名波先生もそのお話しに賛意を示された。今に

して思うと、この懇談会が「琉球文学大系」が“夢”から実現可能な事業へと歩み出した時であったように思う。その後は、学長のすぐれた見識と我が沖縄に対する深い愛情、そして強力なリーダーシップが大きな原動力となって、大学の正式な事業として位置づけられるに至ったのである。

私は、名桜大学のこの事業はまさに世紀の事業だと思っている。琉球・沖縄の歴史上、まったく初めての試みであり、その成果は県民はじめ世界のウチナーンチュのアイデンティティーに深く関わる事業に成るはずである。国は言うに及ばず、沖縄県もこの視点をもった琉球文学のテキスト作りには思いを巡らすことはできなかった。これを名桜大学がなすのである。この事業の完成の秋、名桜大学と大学を支援する北部圏域は琉球・沖縄文化を世界へ発信する大学・地域として世界へ評価されることになるだろう。と同時に、名桜大学は琉球・沖縄文化研究の知の拠点として多くの人々に認められていくことになるだろう。これほどに歴史的に意義と価値のある仕事なのである。

「琉球文学大系」は、琉球文学、琉球・沖縄文化研究の蓄積を集約したものとなるはずである。私は、本「大系」が研究者のみでなく、沖縄県民、そして広く琉球・沖縄文化に愛着と関心を持っている世界の人々のものとなって欲しいと思っている。この120年の琉球・沖縄研究の成果を届け、琉球文学と琉球・沖縄文化により一層親しんで貰いたいと思っているのである。そのためには、信頼できる本文を作成することと、作品を読んでその意味するところが理解できるようにしなければならない。作品一つ、一つに現代語訳がつけられれば言うことはないが、残念ながら、紙幅の都合でそれは叶わない。とすれば、それに代わるものとして、可能な限り多くの語注・解説をつけなくてはならない。しかし、それが専門家を満足させるだけの、言うところの、訓詁注釈に凝り固まってはいけない。分かりやすく、しかも、研究の水準を保ったものを目指さなければならない。研究の成果が詰まったテキスト作りが求められているのである。これは「言うは易く行うは難し」である。これこそすべての執筆者を悩ませることだろう。先生方の苦闘が思われるが、先生方のお力と沖縄を愛するお心に期待する所以である。すべての先生方のご健闘をお祈りしたい。

2019 年度上半期業務報告

(4月～9月)

「琉球文学大系」編集刊行事務局の看板上掲式を 挙

4月1日、「琉球文学大系」編集刊行事務局設置にともなう看板上掲式を、名桜大学環太平洋地域文化研究所入口にて挙

行いたしました。編集刊行事務局は、12年間に亘る「琉球文学大系」(全35巻)の編集および刊行へ向けての実務作業から各種会議の開催、予算の管理、また学内外関係委員との円滑な連携体制の構築を大きな役割として設置されました。

看板上掲式には、山里学長兼名誉委員長、波照間委員長、照屋副委員長、山里委員、小番委員、屋良委員、鈴木副学長、仲尾次環太平洋地域文化研究所長、小嶋副所長、渡具知編集刊行事務局長ほか事務局職員が出席し、山里学長、波照間委員長によって看板の上掲が行われました。



看板上掲式の様子

第1回文学・歴史・民俗班別会議を開催

4月28日に文学班会議、5月11日に民俗班および歴史班会議を、沖縄県立芸術大学附属研究所にて開催いたしました。各会議とも土曜日の開催となりましたが、多くの委員の方々にご出席いただきました。会議では、波照間委員長から「琉球文学大系」の構想や刊行年次についての計画、収録文献などについての詳細な説明があり、各委員から刊行に向けての意見や質問などが出て、活発な意見交換が行われました。

班によっては、早くもテキスト検討会の日時や場所など作業に関する具体的な話し合いも行われ、各委員による自主的な動きが本格化しています。



文学班会議の様子

事業開始記念・桜の植樹セレモニーを挙

7月4日、山里学長(兼名誉委員長)、波照間委員長、小嶋副所長ほか、学内委員、事務局職員が出席し、「琉球文学大系」事業開始にともなう桜の植樹セレモニーを、環太平洋地域文化研究所前にて行

いました。はじめに、山里学長よりご挨拶があり「全巻刊行する頃には、この桜が大系の立派なシンボルとして大きく育つことを期待している。各委員には健康に気をつけて、頑張ってもらいたい」との激励のお言葉をいただきました。そのあと、山里学長、波照間委員長、小嶋副所長によって土入れが行われ、出席者全員で全巻の完成を祈念いたしました。



土入れ式の様子

「琉球文学大系」関係委員及び職員が確定

本事業にかかわる関係委員および事務局職員を以下、紹介します。

(1)編集刊行委員会

名誉委員長 山里 勝己 名桜大学学長
委員長 波照間永吉 名桜大学特任教授
副委員長 照屋 理 名桜大学上級准教授
委員 赤嶺 政信 琉球大学名誉教授
(五十音順) 赤嶺 守 名桜大学特任教授
麻生 伸一 沖縄県立芸術大学准教授
飯田 泰彦 竹富町役場職員
石川 恵吉 名桜大学環太平洋地域
文化研究所非常勤職員
上里 賢一 琉球大学名誉教授
上原 孝三 沖縄尚学高等学校教諭
大胡 太郎 琉球大学教授
大城 學 岐阜女子大学教授
狩俣 繁久 琉球大学教授
小嶋 洋輔 名桜大学上級准教授

小番 達 名桜大学教授
鈴木 耕太 沖縄県立芸術大学附属研究所
専任講師
平良 勝保 沖縄県立芸術大学附属研究所
共同研究員
平良 妙子 琉球大学准教授
田名 真之 沖縄県立博物館・美術館館長
豊見山和行 琉球大学教授
仲原 伸子 沖縄国際大学非常勤講師
西岡 敏 沖縄国際大学教授
前城 淳子 琉球大学准教授
本永 清 宮古の自然と文化を考える会理事
山里 純一 名桜大学特任教授
屋良健一郎 名桜大学上級准教授

(2)編集刊行事務局

渡具知 伸 編集刊行事務局長
神谷 順子 研究協力係長
石川 恵吉 係員

「琉球文学大系」関連新聞記事目録—2019年4月～9月

琉球新報「琉球文学大系発刊へ／名桜大、12年かけ35巻」(4月2日付)

琉球新報「興味堀起こす／琉球文学大系学びやすさ重視」(4月2日付)

沖縄タイムス「「琉球文学大系」発刊へ／名桜大12年かけて全35巻」(4月3日付)

琉球新報「佐藤優のウチナー評論<583>／名桜大の琉球文学大系／琉球語の正書法確立を」(4月6日付)

琉球新報「あしやぎ／島言葉分かる世代の責任」(4月11日付)

琉球新報「文化研究の礎に—「琉球文学大系」編集へ<上>／波照間永吉／琉球語の将来確立へ／名桜大、地域
貢献事業に」(5月1日付)

琉球新報「文化研究の礎に—「琉球文学大系」編集へ<中>／麻生伸一／今後100年の基礎資料／一般の人も親
しめる本に」(5月2日付)

琉球新報「文化研究の礎に—「琉球文学大系」編集へ<下>／大城學／「琉狂言」解説付け公開へ／口立芝居の
校合、重要に」(5月3日付)

公明新聞「琉球文学をたどって26／波照間永吉／琉球文学の継承①／「大系」化し未来の世代に繋ぐ」(9月29
日付)

各巻担当委員の皆様へ

次回の全体会議開催のお知らせ

次回の会議開催は下記の日程を予定しています。日程調整のほど何卒よろしくお願い申し上げます。なお、正式な時間と場所が決まりましたら、再度ご連絡いたします。

開催予定日：2019年12月14日(土)午後